

北欧 福祉と教育 街歩き

③オーロラ小学校再訪

蘭部英夫=文・写真



by Kinbe & Ryo

メモ(3)

フィンランド

人口530万人

首都=ヘルシンキ(人口57万人)

12世紀に北方十字軍によりスウェーデンに、19世紀以降はロシアに支配され、第二次世界大戦ではドイツと同盟し敗戦、多大な賠償金を支払う。そのため、ヘルシンキオリンピックの1952年が福祉国家のスタートだ。

フィンランド語は優しく、柔らかく、こちよいと全盲の正岡光雄さんが言う。「ギートス(ありがとう)」「ナケミーン(さようなら)」、そして「ミナ オレンヤ バニライネン(私、日本人)」。

オーロラ小学校(基礎学校)のバルト校長のなつかしい甲高い声が出迎えてくれた。首都ヘルシンキに隣接したエスポー市は人口22万人。携帯電話のノキアのある町だ。子どもたちは329名、教師21名、アシスタント11名。給食、看



【写真上】5年生になった子どもたち。「学校で好きなことはなんですか」と聞くと、ハイハイ!と手が上がり、算数!歴史!英語!言葉の勉強!と「教科」が続き、体育・休み時間・家庭科。みんな、学ぶことが楽しそうだ



【写真下】2年生のときの教室風景

護師、心理職、ソーシャルワーカーがサポートする。演劇教育に力を入れていて、机上の勉強だけではなく、一緒にアクティブな活動にとりくむ方針だという。インクルーシブ教育も先進的にとりくみ、特別な支援が必要な子が30名、障害児教育専門の教師が2名、アシスタント2名の体制だ。「ありのままの姿でいられること。やる気をおこさせること」「知識の倉庫ではなく、人間として成長できることが大事だ」とバルト校長は強調する。

前回訪問した2007年1月当時、彼ら彼女らは2年生だった。いま、5年生になった子らが24人。ダウン症の男の子や3人の女の子はそれぞれみんな大きくなった。

「シアター授業」にとりくんで30年というベテラン教師が担任で、障害児教育担当の副校長がそれをサポートする。

赤ずきん!三びきのこぶた!グループで相談し、助け合いながら「ジエスチャー」する演劇授業

だ。

副校長は、「ずっと同じクラスだから、一緒にいることがあたりまえ。スローな子がいてもみんな気にならない」「子どもたちは大切なことを身をもって学んでいる。人生にとって大切なことだと思う」と言い、「しかし、障害の重い子は特別な学級で勉強した方がいいと思う。市では『こういう方針でない』とダメ」とは決めている。親の希望で、こうしたインクルーシブ教育があれば、特別な学級、学校もある」。

バルト校長は言っていた。「大事なものは教員の確保だ。障害児を入れても教育条件が悪いと、健常の子、障害児双方にもいい効果はでない。そうでないと悲惨なことになる可能性がある」。

*

排除することの対極にある「インクルーシブ」の思想と実践が障害者権利条約の核心だ。第24条「教育」でもインクルーシブ教育が強調される。しかし、「インクルーシブ」は他国から持ち込まれた借りものではない。

そのべ ひでお 1956年群馬県生まれ。



【写真右上】バルト校長は駐車場まで私たちを迎えに来てくれた(右手に拙著「北欧 考える旅」が)

【写真右下】食堂前の廊下で。みんな穏やかで元気だ

【写真上】放課後のブランコ



「この子らを世の光に」。私たちの先輩たちが築いてきた思想と実践は世界潮流をリードするものが少なくない。それは私の確信だ。

*

授業が終わると、みんなリユックを背負って、先生と握手をした。あつという間に校庭に遊びにいった。教室ではつまらなそうに座っていた彼女は、笑顔でブランコをこいでいた。

特別支援を必要とする子どもたちの教育(エスポー市の教育要覧より。安藤房治訳) エスポー市の学齢児の4分の1程度が学習において何らかの特別支援(special support)を受けている。最も一般的な支援の方法は、治療的な教育(remedial teaching)と一定時間特殊教育(part-time special education)を受けることです。さらに、特別なニーズをもつ子どもたちを支援する最優先の方法は通常学級での活動で居心地の良い学習環境を準備することです。 エスポー市の学齢児のおよそ10%が特殊教育を受けていますが、その内の3分の1が通常学級で学習をしています。 各校には、1、2人の様々な特殊教育の専門教員が配置され、それに加え、エスポー市にはおよそ450人の支援員(learning assistants)が働いています。 エスポーでは、多様で柔軟な小グループ編制の特殊教育を展開しています。市立の一般の総合学校(小・中学校)の半数以上で小グループ編制による指導が行われています。